梅花女子大学文化表現学部紀要, 19:64-71

『万葉集』巻二・一三〇番歌の解釈について
―「丹生乃河　瀬者不渡而　由久遊久登」の背景―

市瀬　雅之

はじめに

『万葉集』の巻二「相聞」に収められている一三〇番歌（以下「当該歌」と呼ぶ）は、訓読にも解釈にも揺れを残している。その整理は、尾崎富義「長皇子の歌」に詳しい(1)。その中にあっても、「丹生乃河」から歌い起こされる意味はほとんど問題にされていない。上二句が「由久遊久登」の序となっていることに着目すると、「丹生乃河」にそう表現させる背景が存在する可能性が認められる。

本稿は、その検討から当該歌の解釈を試みたい。

一、問題の所在

長皇子与皇弟御歌一首

丹生乃河　瀬者不渡而　由久遊久登　恋痛吾弟　乞通来祢(2)

（2・一三〇）

初句の「丹生乃河」は、所在への考察があっても歌の解釈にまで及ぶものが少ない。そうした中に踏み込んで論じているのが、吉村誠「相聞歌の『遊び』」(3)である。

飛騨人の真木流すといふ丹生の川言は通へど舟そ通はぬ

（7・一一七三）

右の歌が「丹生の川」を詠み込んでいるのに着目して、

影響関係は不明であるが、この例と長皇子の「丹生川」に対する観念が同じであると考えるならば、「丹生川」とはことさら渡河の難しい川という意味に描かれていると認められる。

と指摘した。これを支持する池原陽斉「『長皇子与皇弟御歌一首』考」(4)は、

吉村は「影響関係は不明」と慎重であるが、「飛騨人の真木流すといふ」という伝聞表現からみて、飛騨の丹生川の特性は人口に膾炙していた可能性がたかいのではないか。そうであれば、（中略）この地は一種のうた枕として機能していたと考えられる。

と首肯する。また、

久米禅師が石川郎女を娉ふ時の歌五首

み薦刈る信濃の真弓我が引かばうま人さびて否と言はむかも　禅師

（2・九六）

み薦刈る信濃の真弓引かずして強作留わざを知るといはなくに　郎女

（2・九七）

を例として、

事物の特徴を取り入れた作で、当該歌の「丹生の川」も同工異曲なのではないか。そして、当該歌の場合には、「丹生の川」と詠むことで、「来訪を促しているのに、どうして「瀬を渡らずて」というのか、当ててみせよ（渡ることが困難で有名な、あの丹生の川だからだよ）」という謎かけも意図されていると考えられる。

と述べる。

ここでは吉村論文が条件とする、一一七三番歌に詠出された「丹生の川」

の理解が、当該歌に詠まれる「丹生乃河（丹生の川）」のそれと同じであるのかを確認するところから検討を進める。

一一七三番歌は、言葉は通うけれど船は通わないと、川を渡ることの難しさを表す。吉村前掲論文は、

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らす歌一首

人言を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る　（2・一一六）

を引用し、川が恋の障害になっていると解する。

これに対して、当該歌の「丹生乃河（丹生の川）」は「瀬者不渡而（瀬は渡らずて）」と表現されている。この二句を受けているのが「由久遊久登（ゆくゆくと）」になろう。その解釈には、平安時代以降の用例が参考にされてきたのだが、時間的な隔たりが大きい。ここでは『万葉集』中に用例を求めておく。

「由久」のみの表記に着目すると、

八代女王、天皇に献る歌一首

君尓因　言之繁乎　古郷之　明日香乃河尓　潔身為尓去　一尾云「龍田超　三津之浜辺尓　潔身四二由久」(5)　（4・六二六）

君により言の繁きを故郷の明日香の川にみそぎしに行く　一の尾に云ふ「龍田越え　三津の浜辺に　みそぎしに行く」

と「行く」に当てられ、「遊久」の表記も、

吉野宮に幸せる時に、弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌一首

古尓　恋流鳥鴨　弓絃葉乃　三井能上従　鳴濟遊久(6)　（2・一一一）

古に恋ふる鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く

と「行く」を表す。「行く行くと」とテンポよく繰り返されるところに、川を進み続ける様子が表現されている。

試みに、長皇子の他の歌を参考にしてみよう。

長皇子の御歌

霰打　安良礼松原　住吉乃　弟日娘与　見礼常不飽香聞　（1・六五）

霰打つ安良礼松原　住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも

は「安良礼松原」という地名に「霰打つ」との景が提示されている。「あられうつ　あられまつばら」と、同音がテンポよく繰り返えされることによって、霰が降る様子が表現されている。それが三句以降で、住吉に住む「弟日娘与」と見ても見飽きないと讃えられている。

長皇子の御歌

吾妹子乎　早見浜風　倭有　吾松椿　不吹有勿勤　（1・七三）

我妹子を早み浜風　大和なる我松椿吹かざるなゆめ

右の歌は、「早見」という地名に「早く見たい」の意が重ねられて、初句にその対象が「吾妹子乎」と冠せられる。その意を含んだ「浜風」が景として示されている。「はやみ　はまかぜ」と同音の繰り返しは、小気味よく歌を読ませる。上二句によって示された「吾妹子」に早く逢いたいという思いを含む「浜風」に、下三句は、大和に私を待つ松や椿に吹かないようなことがないようにせよと念を押す面白さが認められる。

言葉巧みに景を詠出する方法は、

長皇子の御歌

暮相而　朝面無美　隠尓加　気長妹之　廬利為里計武　（1・六〇）

宵に逢ひて朝面なみ名張にか　日長き妹が廬りせりけむ

にも見出すことができる。「隠（名張）」から「宵に逢ひて朝面なみ」と、女性の姿が表現されている。「宵にあひてあした面なみ」と同音が繰り返されるリズムが添えられている。それが出かけて日数を経た「妹」の「廬りせりけむ」姿と重ね合わせられているところに面白さが認められる。

長皇子と志貴皇子と、佐紀宮にして倶に宴する歌

秋去者　今毛見如　妻恋尓　鹿将鳴山曾　高野原之宇倍
秋さらば今も見るごと　妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原の上

右の一首、長皇子　（1・八四）

右の歌はそれまでと違い、下句に「妻恋ひに鹿鳴かむ山そ」と「高野原の上」の景が示される。秋になったら「今も見るごと」と、それが何かを見て想像された景であるところに面白さが認められる。

長皇子の歌をこのように一覧すると、地名に関わる景が、音の繰り返しや言葉巧みに、或いは時に何かを見ながら表現されるところに特徴が見出される。当該歌の場合、その鍵となるのが「丹生乃河（丹生の川）」となる。

「丹生乃河（丹生の川）」の所在についても確かめておく必要がある。前掲一一七三番歌は、「飛騨人の真木流すといふ」との表現が「丹生の川」の所在を規定している。これは例えば、大伴家持が「二上山の賦一首　この山は射水郡にあり」（17・三九八五～三九八七）に、

射水川　い行き巡れる　玉櫛笥　二上山は（以下略）（17・三九八五）

と歌い起こすのが留意されよう。題詞にも「この山は射水郡にあり」と注記されるのは、大和国の二上山との区別があってのことが考えられる。「丹生乃河」も、それだけで想起される川が別に存在した。一一七三番歌には「飛騨人の」と断ることが求められたと考えられる。

当該歌の第三句が「吾弟」と記すところには、弓削皇子歌が想起されよう。前掲一一一番歌のほかにも、

弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首

吉野川行く瀬の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも　（2・一一九）

弓削皇子の吉野に遊でませる時の御歌一首

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむと我が思はなくに　（3・二四二）

と点線で示すように、吉野川或いは吉野が詠まれている。兄である長皇子が、吉野川の支流にあたる「丹生乃河（丹生の川）」をモチーフとすることは、それほど唐突なことのように思われない。

当該歌には、吉野川に注ぐ「丹生乃河（丹生の川）の」瀬が深いので歩いては渡らないが、「行く行くと」船ででも渡る様子が表現されていると考える余地もある。しかし、それでは後述する下二句との接合を捉えきれない。本稿では、川を渡らない別の可能性を考えておく。

二、上三句の背景と解釈

ここでは「丹生」の地名を詠む次の歌に着目する。

斧取りて　丹生の檜山の　木伐り来て　筏に作り　ま梶貫き　磯漕ぎ廻つつ　島伝ひ　見れども飽かず　み吉野の　滝もとどろに　落つる白波

斧取而　丹生檜山　木折来而　筏尓作　二梶貫　礒榜廻乍　嶋伝　雖見不飽　三吉野乃　滝動々　落白浪　（13・三二三二）

反歌

み吉野の滝もとどろに落つる白波留まりにし妹に見せまく欲しき白波
三芳野　滝動々　落白浪　留西　妹見西巻欲白浪　（13・三二三三）

右の二首

傍線部には、斧を取って丹生の檜の山から、木を伐り出して筏を作り、磯を漕ぎ廻る者たちの姿が「見れども飽かず」と讃えられている。伐り出された檜が筏に組まれ、磯を漕ぎ巡るのは丹生川にはじまろう。飯泉健司「水路―筏師」(7)は、そうした筏の漕ぎ手を、

当該歌の「斧取りて……筏に作り」という表現は、丹生神人集団とも言うべき、ニフツヒメ神を信奉する、筏・伐木に携わる専業集団の労

働情景を歌ったのであろう。このような解釈をすれば、敢えて「丹生の檜山」と述べていることも理解しやすくなる。言うまでもなく、その山とはニフツヒメ神を掌る山であり、この女神の霊力を秘めた筏ということになる。

大和人と推定される作者が実際に筏・伐木作業に従事していたとは考えられないが、それをあたかも自身でなしたかの如く表現して、筏・伐木の集団の一員であるように歌いあげる点に、かえってこの歌の特長を見出すことができるのではなかろうか。

と指摘する。具体的には、次に掲げる『今昔物語集』巻十一「弘法大師始建高野山語第二十五」の中に、「丹生神人集団」の存在を見出した。

今昔、弘法大師、真言教諸ノ所ニ弘メ置給テ、年漸ク老ニ臨給フ程ニ、数ノ弟子ニ、皆、所々ノ寺々ヲ譲リ給テ後、「我ガ唐ニシテ擲ゲシ所ノ三鈷落タラム所ヲ尋ム」ト思テ、弘仁七年ト云フ年ノ六月ニ、王城ヲ出テ尋ヌルニ、大和国宇智ノ郡ニ至テ一人ノ猟ノ人ニ会ヌ。其形、面赤クシテ長八尺許也。青キ色ノ小袖ヲ着セリ。骨高ク筋太シ。弓箭ヲ以テ身帯セリ。大小二ノ黒キ犬ヲ具セリ。即チ、此人大師ヲ見テ、過ギ通ルニ云ク、「何ゾノ聖人ノ行キ給フゾ」ト。大師ノ宣ハク、「我レ、唐ニシテ三鈷ヲ擲テ、『禅定ノ霊穴ニ落ヨ』ト誓ヒキ。今、其所ヲ求メ行ク也」ト。猟者ノ云ク、「我レハ是、南山ノ犬飼也。我レ其所ヲ知レリ。速ニ可教奉シ」ト云テ、犬ヲ放テ令走ル間、犬失ヌ。大師、其ヨリ紀伊ノ国ノ堺大河ノ辺ニ宿シヌ。此ニ一人ノ山人ニ会ヌ。大師此事ヲ問給フニ、「此ヨリ南ニ平原ノ沢有リ。是其所也」。明ル朝ニ、山人大師ニ相具シテ行ク間、密ニ語テ云ク、「我レ此山ノ王也。速ニ此ノ領地ヲ可奉シ」ト。山ノ中ニ百町計入ヌ。山ノ中ハ直シク鉢ヲ臥タル如クニテ、廻ニ峰八立テ登レリ。檜ノ云ム方無ク大ナル、竹ノ様ニテ生並タリ。其中ニ一ノ檜ノ中ニ大ナル竹胯有リ。此ノ三鈷被打立タリ。是ヲ見ルニ、喜ビ悲ブ事限無シ。「是禅定ノ霊崛也」ト知ヌ。「此ノ山人ハ誰人ゾ」ト問給ヘバ、「丹生ノ明神トナム申ス」。今ノ天野ノ宮、是也。「犬飼ヲバ高野ノ明神トナム申ス」ト云テ、失ヌ。

大師返給テ、諸ノ職皆辞シテ、御弟子ニ所々ヲ付ク。東寺ヲバ実恵僧都ニ付ク。神護寺ヲバ真済僧正ニ付ク。真言院ヲバ真雅僧正ニ付、高雄ヲ棄テ南山ニ移リ入給ヌ。堂塔房舎ヲ其員造ル。其中ニ、高サ十六丈ノ大塔ヲ造テ、丈六ノ五仏ヲ安置シテ、御願トシテ名ヅケツ、金剛峰寺トス。（以下略）(8)

当該歌も同じ方向で検討することができよう。ただし、提示された資料は時代を下りすぎている。本稿では、弘法大師が高野山に金剛峯寺を開く以前の「丹生ノ明神」（本論の本文では「丹生都比売神」で統一する）に着目する。

市瀬雅之「紀伊国・玉津島の稚日女尊と天野祝が祀る丹生都比売神 ―『紀伊続風土記』の検証を手がかりにして―」(9)は、『播磨国風土記』逸文（『釈日本紀』十一）(10)の次の内容に注目する。

息長帯日売命、新羅国を平けむと欲したまひて下り坐しし時、衆の神に禱りたまひき。その時、国堅めましし大神の子、尓保都比売命、国造石坂比売命につきて、教へて曰りたまはく「好く我が前を治め奉らば、我ここに善き験を出して、比々良木の八尋桙根の底不附国、越売の眉引国、玉匣賀々益国、苫枕有宝国、白衾新羅国を、丹の浪を以ちて平伏け賜はむ」とのりたまふ。かく教へ賜ひここに赤土を出だし賜ひき。その土を天の逆桙に塗りたまひ、神舟の艫と舳に建てたまふ。また御舟の裳と御軍の着衣を染めたまひぬ。また海水を撹き濁して渡り賜ふ時、底潜る魚また高く飛ぶ鳥どもも往き来せず、前を遮るものなし。かくて新羅を平伏け已訖りて還上りたまひぬ。乃ちその神を紀

伊国の管川なる藤代の峰に鎮め奉りき。

右の記述には、「赤土（丹生）」を用いて神功皇后の新羅征討を助けた「尓保都比売命」が、傍線部の如く紀伊国の筒川の藤代に祭られたと記されている。「尓保都比売命」を奉祭する者たちには、「赤土（丹生）」を運んでいた様子が伝えられている。「丹生乃河（丹生の川）」を下るのは筏のみではなく、船の存在が見出される。紀ノ川の河口まで下り続けるところに「行く行くと」と表現される映像が存在する。船は、さらに茅渟の海を介して、播磨国まで進められている。

播磨国と紀伊国との間では、『住吉大社神代記』(11)が「凡そ大神の宮、九箇所に所在り」と、次のように記すのが留意される。

当国　住吉大社（四前）
　西成郡　座摩社（二前）
　菟原郡　社（三前）
播磨国賀茂郡　住吉酒見社（三前　戸三烟）
長門国豊浦郡　住吉忌宮（一前）
筑前国那珂郡　住吉社（三前）
紀伊国伊都郡　丹生川上天手力男意気続々流住吉大神
大唐国　一処　住吉大神社（三前）
新羅国　一処　住吉荒魂（三前）

傍線で示したように「紀伊国伊都郡」には、「丹生川上天手力男意気続々流住吉大神」の存在が示されている。住吉大社が紀ノ川を遡上して、「伊都郡」まで信仰を広めていた様子をうかがわせる。その後の条には「部類神」が、

当国　広田大神
筑前国　櫃日廟宮
糟屋郡　阿曇社（三前）
播磨明石郡　垂水明神
紀伊国名草郡　丹生咩姫神

と記されている。傍線で示した「紀伊国名草郡　丹生咩姫神」が、「尓保都比売命」であると捉えてみると、丹生都比売神を「名草郡」まで認めていた様子がうかがわれる。「部類神」との位置づけに、穏やかな関係が築かれていたことが知られる。紀ノ川の往来には、物流の利権に大きな魅力が見出され、多くの筏や船などの往来が想定される。

以上の内容を視野に入れ、「丹生の川　瀬を渡らずて　行く行くと」との訓読に、敢えて言葉を加えて訳してみると、

丹生の川は（深いので）瀬を渡らないで（磯を廻り）行く行くと（下り続けるように）

とでも解されるような映像が、作歌の背景に存在する可能性を見出すことができる。

三、下二句の解釈と上三句との接合

下二句も検討しておこう。

第四句は「恋痛吾弟」と記されている。「恋痛」は今日でも、「恋痛し（コヒタシ・コヒイタシ）」（新編日本古典文学全集・新日本古典文学大系・万葉集釈注）とも、「恋痛き（コヒタキ・コヒイタキ）」（万葉集全注・万葉集全歌講義・万葉集全解）とも訓みが分かれている。

前者は、「吾弟」と句またがりになることが知られる。澤瀉久孝『万葉集注釈』(12)は、形容詞の終止形でそれになる例として、

ま菅よし宗我の川原に鳴く千鳥間なし　我が背子我が恋ふらくは
真菅吉　宗我乃河原尓　鳴千鳥　間無吾背子　吾恋者（12・三〇八七）

を指摘する。傍線で示した上三句が「間なし」の序詞となり、点線で示した「我が恋ふらくは」に掛かることを考えると、当該歌は、上三句の序詞

が「恋痛」を修飾することになる。「痛」は、前掲一一六番歌に見えるように、或いは、

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ひて作らす歌一首

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りなな言痛くありとも

秋田之　穂向乃所縁　異所縁　君尓因奈名　事痛有登母（2・一一四）

と、噂の「激しい」様子が表されている。当該歌の第四句を「恋痛し（コヒタシ・コヒイタシ）」と読んでみると、

丹生の川は（深いので）瀬を渡らないで（磯を廻り）行く行くと（下り続けるように）恋しく想う気持ちが激しい。

となろう。丹生川を下る者たちの姿に、長皇子が自身の恋情を擬えたことになる。

後者になると、「恋痛き（コヒタキ・コヒイタキ）」と読むことで、「吾弟」を修飾する表現となる。「吾弟」の訓読には諸説が提示されてきたが、今日の多くの注釈書が、「我が背」との読みに落ち着いている(13)。本稿もひとまずそれらにならいたい。「背」の部分に「弟」が当てられているところに表記の面白さがあり、弓削皇子が想起される。その意は、

丹生の川は（深いので）瀬を渡らないで（磯を廻り）行く行くと（下り続けるように）恋に激しい我が弟よ。

となる。こちらの解釈では、「恋痛き」と表される恋情が弓削皇子のものとなる。それが何に基づくのかが問われる。

留意したいのは、当該歌の題詞に、

長皇子与皇弟御歌一首

と記されていることである。「与」を使用する他の題詞を、当該歌を含む巻二に求めてみると、弓削皇子の次の歌が存在する。

幸于吉野宮時、弓削皇子贈与額田王歌一首

古に恋ふる鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く（2・一一一）

額田王奉和歌一首　従倭京進入

古に恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし我が思へるごと（2・一一二）

一一一番歌のように鳥を見ても「恋」を詠む弟を、長皇子が「恋痛き我が背（恋痛吾弟）」と表現したと考えられなくはない。弓削皇子は額田王に歌を贈り「与えた」が、長皇子は弓削皇子に当該歌を「与えた」と解すことができる。その際、一一一番歌には「贈り」と記されていることが留意されよう。一一二番歌に「和へ奉る」と記されるのに呼応する。当該歌には二人で歌を交わした様子が認められない。一首で作られるような状況で詠出されたと考えるのが穏やかであろう。第四句の表現と表記から、弓削皇子に与えられた恋歌として題詞が記され、巻二の一三〇番に配置されたと考えられる。

結句の「乞通来祢」は、「乞」は「コチ」とも「イデ」とも訓みが分かれている。ただ今日の諸注釈は、いずれも「出で」に落ち着いているように思われる。ここではそれらに従い「出で通ひ来ね」と訓読しておく。

第四句の「恋痛」を「恋痛し（コヒタシ・コヒイタシ）」と読むと、長皇子が弟に会いたがっているのだが、自らは訪ねられない事情があるのであろうか、弟に訪ねて来ることを求めている。上三句は、長皇子の激しい恋情を修飾する句として機能するが、結句にもかかり（行く行くと）訪ねることが求められるところに面白さがある。

このように一首を考えてみると、

丹生の川は（深いので）瀬を渡らないで（磯を廻り）行く行くと（下り続けるように）想う気持ちが激しい。我が弟よ（行く行くと）訪ね続けておくれ。

と解すことができる。

第四句の「恋痛」を「恋痛き（コヒタキ・コヒイタキ）」と訓読してみると、弓削皇子が「恋痛き」存在となる。鳥の鳴き声にも古の恋を歌い起こす弓削皇子に、長皇子が訪ねて来ることを求めている。

丹生の川は（深いので）瀬を渡らないで（磯を廻り）行く行くと（下り続けるように）恋に激しい我が弟よ、（行く行くと）訪ね続けておくれ。

と解される。

いずれに読んでも、上三句には「丹生乃河（丹生の川）」を、巧みに筏や船を操り、紀ノ川の河口まで下り続けてゆく者たちの映像が、皇子の恋情と来訪を誘う序詞に援用されたと考えられる。

おわりに

当該歌の下二句の訓読は、現時点で一つに決めることが難しい。「恋痛し（コヒタシ・コヒイタシ）」と読んでみると、何らかの事情で弟を訪ねることのできない長皇子が、弟の弓削皇子に来訪し続けることを求める歌となる。「恋痛き（コヒタキ・コヒイタキ）」と読んでみると、恋情激しい弟として表現される弓削皇子に、長皇子が来訪し続けることを求めている歌となる。どちらの読み方にも一長一短が認められる。そうした中で、本稿はひとまず上三句の解釈を見直すものであった。

「丹生乃河（丹生の川）」は深いので瀬を渡ることがない。山から木を伐り出し筏に組んで磯を廻り、或いは赤土を積む船を操りながら、巧みに紀ノ川の河口まで下り続ける者たちが存在したことを述べた。例えば、南海道が旅を支える陸の道とするなら(14)、「丹生乃河（丹生の川）」から紀ノ川の河口までの流れには、生業を支える川の道が存在した。

当該歌の上三句は、川の道を生業とする者たちの映像が序詞に援用され、下二句に示される恋情の激しさと来訪し続けることを希求する心情を導く表現となっているところに面白さがあることを述べた次第である。

注

（1）尾崎富義「長皇子の歌」『セミナー万葉の佳人と作品』第三巻 一九九九年 和泉書院）

（2）小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳 新編日本古典文学全集『万葉集』①～④（一九九四年四月～一九九六年八月 小学館）をテキストにしている。

（3）吉村誠「相聞歌の『遊び』」『大伴家持と奈良朝和歌』二〇〇一年九月 おうふう 初出は、一九八九年三月。

（4）池原陽斉「『長皇子与皇弟御歌一首』考」『東洋通信 東洋大学補助教材』二〇一五年八月 第五三巻 第三号。

（5）正宗敦夫編『万葉集総索引』単語編（一九七四年五月 平凡社）は、「由久」の用例を他にも、

4・六二六、5・八〇〇、八七四、八七五、7・一二三四、14・三三六六、三四四三、三五一〇、三五一九、三五二二、三五六七、15・三五八〇、三六〇七、三六一二、三六二五、三六三一、三六三六、三六三七、三七〇六、三七二四、17・三八九七、三九二七、四〇〇二、四〇〇三、四〇〇六、四〇〇八、四〇一一、18・四〇四二、19・四二六三、20・四三二五、四三二七、四三三一、四三三八、四三七二、四四七六、四四一〇、四四一四、四四一六、四四二五、四四三六、四四八三

と数える。

（6）前掲注（5）書は「遊久」の用例を他にも、「2・一一一、二三四、14・三三六二」と数える。

（7）飯泉健司「水路―筏師」『王権と民の文学――記紀の論理と万葉人の生き様』武蔵野書院 二〇二〇年、初出は一九九〇年。

（8）馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳 新編日本文学全集『今昔物語集』①（一九九九年四月 小学館）をテキストにしている。

（9）市瀬雅之「紀伊国・玉津島の稚日女尊と天野祝が祀る丹生都比売神―『紀伊続風土記』の検証を手がかりにして―」二〇二一年三月『梅花女子大学文化表現学部紀要』一七号。

（10）植垣節也校注・訳 新編日本古典文学全集『風土記』（一九九七年十月 小学館）廣岡義隆担当逸文をテキストにしている。ただし私意によって一部を書き改めた。

（11）田中卓『吉大社神代記の研究』（『田中卓著作集』7 一九三五年十二月 国書刊行会）をテキストとしている。

（12）澤瀉久孝『万葉集注釈』昭和三十三年四月 中央公論社。

（13）多田一臣『万葉集全解一』（二〇〇九年三月 筑摩書房）は、「我が弟（と）」と訓読する。

（14）市瀬雅之「万葉歌に育まれた風土―真土山・妹背山歌を中心にして―」二〇一九年三月『梅花女子大学文化表現学部紀要』一五号。

※本稿は、二〇二二年年度「上代文学会秋季大会研究発表会」にて口頭発表した内容である。投稿の締め切りと時期が重なったため、席上でいただいたご意見は今後の検討に活かしたい。